甘（あま）いもの嫌い

田辺茂一

「あの頃は全盛期でしたね！」

ある会で、コロンバンの御主人の門倉さんが、ぼくの肩をたたいて、そう云った。

成る程、あの頃は全盛期であったと、そう云われて、ぼくもそう思った。

その頃に較べると、最近はとんと金廻りがわるい。少し纏って散財すると、小遣いを費消したというより、財産を減らした感じである。

あの頃というのは、昭和五、六年の頃である。ぼくの銀座の紀伊国屋は、六丁目のコロンバンさんの前にあった。

丁度その頃、上野にも店があったので、ぼくは、くるまはフォード乍ら、デラックスロードスターを駆って、毎日、銀座・上野の店へ乗りつけた。新しがりやのスノッブで、時には外国映画の見様見真似で、真白い絹の襟巻に、山高帽、高価な白革の手袋をはめて、同じフロントに、夏川静江さんなんかを乗っけて、得意気にハンドルを握ぎっていたものである。

銀座へいくと、その頃はあまり上戸党でなかったぼくは、屡々コロンバンさんのテラスで憩んだ。

新し好きの徳田秋声さんも、よくこのテラスでは、一時間ちかくも休憩んでいて、行き来する銀座マンの好尚を眺めていたものだ。

裕福とは云えなかったが、マスコミに追われないあの頃の作家のほうが、生活にユトリがあり、人生観照も行き届いていたように思われる。

それはとにかく、頭の髪の毛も真黒で、金に苦労のなかった、若さと金のあの頃は、まったく全盛期であった。盛者必滅は世の慣いだが、さいきんはとみに新薬の効用もある。なんとかもう一度、ひと花咲かせたいものだ。

○

というようなわけで、戦後、いろいろの事情で身辺不如意であるが、そう成ってくると、胸中のウサを晴らすべく、戦前の下戸が忽ち上戸に変じた。

となると甘いものはサッパリ受けつけない。和洋両菓子はむろんのこと、珈琲、紅茶、クリーム、ソーダ水さえ駄目である。更に音楽にも無趣味のせいか、音楽喫茶などへでかけることも皆無である。

持って生れた性分で、老来いよいよ、それに反比例して、若い女の子は好きになっていくが、坊主憎けりゃケサまでの類いで、音楽喫茶の女の子までは手が伸びない。

食べ物の嗜好だけでなく、どうも甘さというものが、ぼくには適しない。

甘い手口では、甘い女しかかからねえぢゃねえかというのが、ぼくの持論である。

他人（ひと）のことを余計のことだと云われるかも知れないが、明治大正昭和を通じ、西条八十さんは、立派な尊敬すべき詩人だが、そして美事でさへある甘い感触だが、やはり甘いものとなると、ぼくには、いけない。東郷青児さん又然りだ。

○

旅へ出ても、家への土産のつもりで買っているものが、何んのことはない、酒の肴である。さもなければ、灰落しとか、猪口の類であって、全部自分本位である。

家庭の愉楽を考えぬこと夥しい。そういうことを考えると、どうも甘いもの嫌いという性癖は、反家庭的なものと結びつく。一家の主人が甘いもの好きということは、天下泰平、家内安全、家のなかに絶えず和気が充ち満ちていることになるのではあるまいか。

と思って周囲を見渡すと、どうも甘いもの嫌いの上戸のほうが、人生の橋を危げに渡っている。菓子好きの奴たちのほうが、思想穏健で、あたりも柔かいし、結構、貯財もして、老後の計量もうまく弾き、小まめに、上昇株なども買っているように見うけられる。（一九五九・九）（随筆家）